

『イントゥ・ザ・ワイルド』

2007年／アメリカ／ショーン・ペン監督作品

放浪の旅を続け、
荒野に消えた青年の物語

会員 金井 知明 (61期)

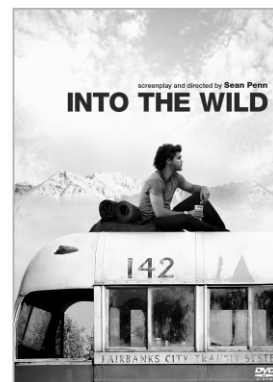
1992年4月、アラスカの荒野で、放置されたバスの中から一人の青年の遺体が発見された。この事件について、雑誌に記事を書くよう依頼されたジョン・クラカワーは、強い関心を抱き、執筆後も取材を継続する。登山家でもあるクラカワーは、自身も若い頃に放浪の旅に出て命を落とした経験があることから、亡くなった青年クリス・マッカンドレスにどこか共感するところがあったのだろう。クラカワーはマッカンドレスの日記を読み、家族や友人、マッカンドレスがアラスカへ行くまで旅先で会った多くの人々に実際に会って話を聞き、彼の足跡をたどる。それをまとめたものがこの映画の原作『荒野へ』である。映画は原作にほぼ忠実に、マッカンドレスの最後の2年間を描いている。

マッカンドレスは裕福な家庭に育ち、大学を優秀な成績で卒業する。しかしその後、自分の借りていたアパートや持ち物を処分し、預金をすべて慈善団体に寄付して放浪の旅に出る。ヒッチハイクやカヌーでアメリカ中を放浪し、様々な人々と出会う。この出会う

人々がそれぞれ素晴らしい。頭でっかちで生意気にも見える青年に対し、対等に接し、時には家族のように寄り添う。そうした交流を繰り返しながら旅を続けた後、マッカンドレスは旅の集大成として、少量の食料とライフルなどをザックに詰め込んで自給自足の生活をするため荒野へと向かう。

マッカンドレスが自分の生き方に思い悩み、それでも自分の人生観を貫きながら旅を続ける姿は、誰もがどこか思い当たるところがあるのではないだろうか。厳しい自然の中で自分の力を試す姿にも、個人的には憧れと共感を覚える。大自然での野生動物との出会い、トレッキング、豪快な川下りなど見ているだけで体がうずうずしてくる。

クラカワーが書いた記事は、アメリカで大きな反響をよんだという。マッカンドレスを高い理想をもった勇気ある若者として称賛する者がいる一方、傲慢と愚行によって命を落としたナルシストとして非難する声も多かったとのことである。皆さんはどう思われるでしょうか。



『イントゥ・ザ・ワイルド』
好評発売中
3,990円(税込)
発売元：ハビネット、
スタイルジャム
販売元：ハビネット